

6. 地球の健康

医事万華鏡

6月5日は「世界環境デー (World Environment Day)」です。この日は1972年6月5日、スウェーデンの首都・ストックホルムで開催された「国連人間環境会議」に由来し、環境保全に対する関心を高め啓発活動を図る日として制定されました。日本でも、6月の1カ月間は環境月間として、環境省や地方自治体、企業などが環境セミナーやイベント、環境に関わる展示会を各地で開いています。

そうした中で、国連環境計画 (UNEP) では「世界環境デー・環境月間」に併せて記念式典を開催し、その年が目指す環境テーマを設定することになっています。ちなみに、昨年のテーマは「Beat Plastic Pollution プラスチック汚染をなくそう」(ホスト国：インド)でしたが、今年は中国がホスト国を務め、世界の都市や地域の空気質改善をテーマに、各国の政府や企業、地域、個人に参加を呼びかけ、杭州市(浙江省)をはじめ複数の都市でイベントを開催することになっています。「世界環境デー・環境月間」を契機に、環境保全に繋がる行動をしていきたいものです。

翻って、わが社も創立時より、地球環境について想いを馳せ、「人にやさしい地球の健康」を提唱して参りました。

フランスの思想家であり古生物学者でもあった
ティヤール・ド・シャルダンが唱えるように、
社会的な意思を有する地球への配慮が人間同士
の関係性と同じものと捉え、人々の幸せと地球
の安寧は連動する、という考えを深く受け止めて
いたからです。

また、JMS誌1993年5号では、当時のユナイテッド・
アース財団会長で、ノーベルファミリーの一員でもあるクラ
ウス・ノーベル博士と「地球の健康と生命の定義」をテーマ
とした対談の機会を持ちました。対談を通して、人の倫理の
欠落が地球の健康を蝕む結果になっているということ、そし
てその倫理には一定の定義が必要とのことで、「地球や人類
の生存にとって正しい影響力を持った行動、技術、仕事であ
るかどうかが基準である」との結論が導き出されました。併
せてA・シユバイツァーの「生命への畏敬」という考えや、
われわれ日本人の宗教観や精神文化の地球環境保全に対する
大きな可能性をも示唆されました。

もちろん、医療と環境にも大きな接点があります。環境が
人の生の基盤であるからです。医療が進歩する一方で医療倫
理が問われている昨今、人と地球の「生き方」が連動するこ
とを思えば、自然と共存するための「アース・エティック(環
境倫理)」への関心の高まりは、おのずと医療倫理に対する
意識を高めることに繋がることでしょう。

今まさに全体性、調和を重んじる生き方が問われていると
言えそうです。物事を地球規模に考え、行動していくことが
期待されています。

(JMS主幹・野村元久)

